

つながり

～やさしく かしく たくましく～

第2号
令和6年6月21日発行



山口大学教育学部附属幼稚園



「遊びは学び」を子どもの姿から見取る

副園長 高田和宜

アジサイが色づき暑さも増し、いよいよプールや池、砂場で水遊びを楽しみ始めているこの頃です。梅雨入りしましたが、蒸し暑さに負けず、楽しさいっぱい過ごしています。

さて、5月下旬から「保育参加」を実施し、6月15日には土曜保育日・第1回ピーマンJr.の会でも子どもたちの遊ぶ様子を見ていただきました。また、幼小中一貫教育の研究を進めるため、附属小、中の先生方も子どもたちの様子を見に来られました。「遊びは学び」と幼児教育ではよくつかわれる言葉ですが、その言葉の意味を子どもの姿から見取るには、幼児理解と気づきのセンスが必要だと思います。6月から大学の幼児教育教室の授業で2年生と3年生の学生が保育参加に入っています。子どもの遊びを観察し、その後ミーティング形式で振り返りの時間をとります。同じ遊びの場面を見ていても気づきや捉えは様々です。2回目の保育参加に入った学生が、子どもが泡遊びをしている場面を多くの学生が見て、そこでの気づきや印象に残っていることを保育参加後のミーティングで出し合っていました。

「ふわふわの泡にしようとして粘り強く繰り返している姿」が紹介されると同じ場面を見ていた学生が「水の量も調整していた」「クリームのようにしたいと言っていた」「友達にもコツを伝えていた」など気づきを伝え合いながら、泡遊びを取り組む中での「育ちや学び」に焦点を当てたミーティングとなりました。幼児にとっては夢中になって泡で遊んでいるだけですが、そこで育まれるものには「粘り強さ」「観察力」「思考力」「調整力」「言葉で伝え合う力」など様々な非認知能力があることに気づくことができました。園でのミーティングをふまえ、各学生が自分の記録を考察したものが提出され大学での授業でまた深められることになっています。そこでの学びを土台にして9月から3年生は教育実習に入ります。

附属小の先生の中にも泡遊びで遊ぶ子どもの姿から「それぞれが追及していました。すごいです。」とコメントを残された方がおられました。現在、やまぐち学園の幼小中一貫教育の研究は「自ら学びをつなぐ子どもの育成～学びの過程に着目して～」を研究主題にして取り組んでいます。「主体的な遊びを中心とする保育」は小・中学校の先生方からは分かりにくいと言われることが多いです。「好きなこととして遊んでばかりで、わがままになるのでは？」と捉える声もあります。小・中学校の授業はてが決まっていて、その学びに向かうように導くまたは教えるスタイルが多いです。幼児教育では、その子の興味関心があるところで「主体的にものや人と関わる中」でどう学び育っていくのかを見届け、自ら学ぶことを支えるが中心なので、そもそも学び方のスタイルにギャップがあります。そのことが「分かりにくい」につながっているのでしょう。そんな一般的な状況があっても、子どもの遊びに「学びの面白さ」や「学びの意欲」を見取れる附属小中の先生方がいることを心強く、誇らしく感じられました。だからこそ、「自ら学びをつなぐ子どもの育成」を研究主題に授業づくりに取り組めるのだと言えます。

保護者の保育参加でのミーティングでは、「同時にいろいろな子どもが要求してくるので対応に困った。」というコメントがありました。保育者側にたって参加されていることが強く伝わりました。保育者と保護者が共に同じ方向で子育てをすすめる関係性を強めていきたいと思えます。